



[令和 5 年 6 月 14 日 定例会発表要旨]

星置神社のあゆみ

星置神社宮司 加藤 剛 氏

星置神社に常駐して今年で 10 年、その前は約 20 年手稲神社にて奉職しておりました。常駐以前の星置神社は、お正月をはじめ春祭、夏祭、秋祭（例大祭）にお参り、それ以外は何時もシャッターがしまった無人の神社でした。星置神社に常駐した当初は参拝も少なく、現在は少しずつではありますが参拝も多くなってきました。私は社家（代々神職）ではなく、妻（手稲神社の娘）と知り合ったのがきっかけで神職の道を歩はじめ現在に至っております。



星置神社について… 星置神社の社紋「三つ巴に星」は全国的に見ても珍しく、この社紋の神社は当社しかないかと思えます。御祭神は「天照大御神」「豊受大神」「大己貴神（大国主神、大国様）」。
また境内社には「星置天満宮（菅原道真公）」「弘法大師堂（空海）」がお祀りしております。この地区の開拓の歴史は明治 17（1884）年にはじまり、この地に夢を抱いて広島県佐伯郡より入植、精神的支え苦楽を分かち合う心の拠り所として明治 20（1887）年に郷里より奉持した御祭神をお祀りし、村落の安泰と発展を祈願致しました。年間、1 月 1 日（歳旦祭）をはじめ、1 月 15 日（古札焼納祭・どんど焼き）、5 月 5 日（春季例祭）、7 月第 2 日曜日（夏季例祭）、9 月秋分の日（秋季例大祭）、12 月 31 日（大祓・除夜祭）といった、祭典と行事を執り行っております。



星置神社の社紋
「三つ巴に星」
(星置神社・提供)

明治 20（1887）年・秋、星置 153 番地（現在の星置 1 条 7 丁目 18）に木造の祠を建立、明治 40（1907）年頃神社境内移転の議が起こり、開村 30 周年記念に合わせて完成することを目標として準備にかかりました。明治 45・大正元（1912）年、神社境内地を星置 17 番地 2（現在の星置南 1 丁目 8-1）に得て、翌年大正 2（1913）年に星置開村 30 周年記念碑と共に軟石造りの小社を建立し、神霊を遷して祭事を年々行ってきました。



昭和 46（1913）年、星置神社例大祭の様子
(星置神社・提供)

時移り都市周辺の農地の宅地化が各所で急速に進み、星置・金山地区もその例外ではなく宅地化されつつあった頃、神社社殿御造営の気運盛り上がり氏子一同心を合わせて努力し、昭和 48（1973）年 9 月現在の社殿御造営、その後、昭和 50（1975）年 9 月社務所御造営、昭和 61（1986）年には社務所増築が行われました。軟石造りの小社にて祭典を斎行していた頃は、小社前に花奠座と座布団を引き、そこに地域の皆さんが参列していました。当時の星置神社宮司（手稲神社先々代 山口榮宮司）は「手稲神社は社殿の広さが限られているので、そこに参列できる人数も限られるが、星置神社は花奠座と座布団を引けばい

くらでも参加できる、とても大きい神社ですよ」と話しをしていたようです。昭和 48（1973）年、現在の社殿御造営並びに境内の整備事業が行われました。境内整備として鳥居、狛犬、灯籠な

どの設置や、耕運機を使って参道の整備も地域の皆さんの手により行われました。特に神社の階段はとても急な階段で、当時作業されていた地域の皆さんは、急な階段でも特に問題ないだろうと造ったようですが、今になって地域の方は「何でこんな急な階段を造ったんだろうね。当時、我々も若かったんだろうな」と、そんなお話しをよく耳に致します。因みに、軟石造りの当時の小社は今も、本殿内にお祀りしております。



現在の星置神社(星置神社・提供)

平成 5 (1993) 年にアイスクャンドル同好会が設立され、お正月の境内をアイスクャンドルの幻想的な光が境内を照らし、多くの参拝者の心を和ませていました。平成 11 (1999) 年には東参道が整備され、平成 12 (2000) 年には神輿会「星置 星神」が設立され、毎年多くの皆さんが集まり、賑やかな神輿渡御となっております。現在の神社は、手水舎に花を飾る花手水を開催、夜でも明るく参拝できるようにと、境内各所にイルミネーションや提灯の明かりを灯し、昼夜問わず多くの参拝者で賑わっております。大正 2 年

(1913) 年現在の境内地に御遷座し、平成 25 (2013) 年御遷座 100 年を迎えました。この地区の氏神様、星置神社は地域の皆様の手厚い御奉仕と崇敬により、現在も古より受け継がれてきた祭事を年々執り行っております。

令和 5 (2023) 年・鎮座 136 年、新時代“令和”ともに未来へ。

[令和 5 年 7 月 12 日 定例会発表要旨]

明治牧場について

手稻郷土史研究会 会員 菊地 忠義

私は 1961 (昭和 36) 年 4 月、釧路工業高校を卒業して明治乳業株式会社に入社しました。根室工場を振り出しに青森県の八戸工場、広島工場、仙台工場に転勤を繰り返し、40 代で乳業とは縁のない関連会社に出向し 60 歳定年を迎えた時には埼玉県に住んでいました。この間一貫して明治乳業から給料をもらっていたのですが、定年後どこで暮らすのかという問題については、30 歳で転勤した広島工場に勤務していたある日、会社の回覧板を見て一つの目途をつける事ができました。それは明治乳業札幌牧場の跡地を住宅団地にするので、土地を購入しないかという^{あっせん}斡旋の文書でした。家族で相談し約 60 坪を購入し、ローンの支払いが始まりました。今から約 50 年前の 1975 (昭和 50) 年ごろの話です。定年の 2 年前に現在の家を建て 2003 (平成 15) 年に念願の札幌移住が実現しました。残念ながら子供たち 3 人は埼玉県で独立しており、妻との 2 人暮らしですが、恵まれた環境の中で早 20 年が経過したところです。



明治牧場はなぜ廃業に至ったのか…一つ目は、近辺に工場が進出し、井戸水の水位低下により乳牛に必要な飲料水が不足する傾向に至ったこと。二つ目は、札幌市の人口増加により農地が市街化し、乳牛の糞尿処理で発生する臭気対策が必要になったこと。三つ目は、1961 (昭和 36) 年 1 月 15 日に発生した牧場牛舎火災以後、都市近郊牧場のメリットが見通せなくなったのではないかと、この 3 つが理由と考えられます。

ていね稲積土地区画整理組合による宅地造成…ていね稲積土地区画整理組合は当時、飯田正男理事長の下に9名の理事を配し、そのうちの1名は明治乳業からの派遣者で1974（昭和49）年にスタートしました。土地の総面積は105ヘクタール、このうち明治牧場は約33ヘクタールを持っていました。この土地を所有していたのは380名の個人地主と明治乳業でしたが、札幌市の仲介、指導も得て、数々の困難を乗り越えて1984（昭和59）年、住宅地が完成、1987（昭和62）年には600戸の住宅が新築されました。この事業完成を記念して発行された記念誌「稲積」に飯田理事長は「大札幌市のベッドタウンとしての理想郷建設の夢がここに実現した」と記し、事業を振り返っています。

住宅地化から約50年、手稲パークタウンの現状…前田2条通りのイチョウの街路樹が大きくなり過ぎたためか約20本が2022（令和4）年に伐採されました。手稲稲積公園は区内2番目の広さ、18.3ヘクタールの運動公園で、夏のていねプール、冬の小山のソリ遊びなど、市民の憩いの場となっています。園内のポプラ、プラタナス、ヤナギは樹高が約20メートルあり、大木の森になりました。住宅地の販売が始まって2年後の1980（昭和55）年には100戸の新築の住宅に移住者があり、パークタウン町内会が活動を始めました。令和5年4月現在の住宅戸数は748戸となっています。昭和62年には、パークタウン町内に稲積小学校が開校されました。町内には明治南公園と明治北公園があり、いずれも手稲山が眺められ、かつてここは乳牛が草を食む牧場だった事を想像できる場所となっています。



現在の「手稲稲積公園」と「ていねプール」
（編集部撮影）

★沖田会長が札幌市西区琴似で手稲前田農場と北海道造林合同会社について講演をされました。

2023（令和5）年7月21日に「カルチャーナイト」のプログラムとして、NPO法人札幌郷土文化推進センター主催の歴史講演会が開かれ、沖田紘昭会長が「手稲に降りた和洋の奇跡」と題し、手稲前田農場と北海道造林合同会社について講演をされました。当研究会の会員も講演を聞きに訪れていました。

講演では、前田農場を開いた旧加賀藩前田家15代当主・前田利嗣^{としつぐ}侯と、農場を継ぎ、当時としては画期的な欧米式農機具を用いた農法を实践した16代・利為^{としなり}侯の功績、北海道造林合同会社の初代支配人・田中^{さかい} 穰と、顧問であり林学博士の本田静六、北海道造林に関わった人々の功績についても紹介されました。

7月28日 金曜日 発行の「さっぽろ10区」にも今回の講演について掲載されています。皆様ぜひご覧くださいませ。（なお記事本文にあります北海道造林の山林の面積について「約4千ヘクタール」と記されていますが正しくは「約1万ヘクタール」とのことです）

次回定例会 ⇒ 発表内容「手稲のアイヌ史研究（その1）」沖田紘昭（手稲郷土史研究会 会長）

9月13日（水）18：15～ / 手稲区民センター 3階 視聴覚室 ※会員でない方のご参加は事前の申し込みが必要です。